

---

---

# 文化的要素の翻訳を 体系化する理論的枠組みの構築

J2200156 矢沢柊

---

# 流れ

1. 研究テーマ
2. 文化的要素の翻訳例
3. 仮説
4. 本研究の分析の道具となる理論の紹介
  - a. 翻訳技法 (Vinay & Darbelnetの翻訳7分類)
  - b. 読者に望む捉え方 (Bennetの異文化感受性モデル-DMIS)
5. 分析の方向性
6. 進捗報告

---

---

# 研究テーマ

『文化的要素の翻訳を体系化する理論的枠組みの構築』

★文化が関わる言葉をどう英語(他言語)に訳せばいいか？  
を体系化すること

翻訳者の「感覚」とされがちな翻訳者の頭の中を分析し、  
実践的なフレームワークを構築したい

これができれば誰でも文化的な要素を翻訳をできるようになる！！

---

# 流れ

1. 研究テーマ
2. 文化的要素の翻訳例
3. 仮説
4. 本研究の分析の道具となる理論の紹介
  - a. 翻訳技法 (Vinay & Darbelnetの翻訳7分類)
  - b. 読者に望む捉え方 (Bennetの異文化感受性モデル-DMIS)
5. 分析の方向性
6. 進捗報告

---

# 翻訳の例(夏目漱石『こころ』の例)

「先生」という単語について

英語版では“Sensei”と書かれている

翻訳者の頭の中では、『先生』について

- ・年長者への敬意
- ・人生の指導員のようなニュアンス
- ・語り手との距離感の独特さ 等

英語圏の読者にこれらのニュアンスをすべて伝えたい。直訳で“Teacher”とすると、全然違う意味になる。

このような意味を含んだ単語は英語に存在しないため、

このニュアンスで読者に受け取ってほしいと考え、“Sensei”という表現を選んだ。

---

# 流れ

1. 研究テーマ
2. 文化的要素の翻訳例
3. 仮説
4. 本研究の分析の道具となる理論の紹介
  - a. 翻訳技法 (Vinay & Darbelnetの翻訳7分類)
  - b. 読者に望む捉え方 (Bennetの異文化感受性モデル-DMIS)
5. 分析の方向性
6. 進捗報告

# 仮説

翻訳者が翻訳するときの頭の中は

読者に文化的要素をどう捉えてほしいか(6段階)

×

翻訳の技法(7種類)

もう少し具体的には

①読者に文化的要素をどう捉えてほしいか？

②①に基づき翻訳技法を決める

例) 先生 (こころ 夏目漱石)を翻訳するときの翻訳者の頭の中

「先生」という要素を日本人と同じ目線(ニュアンス)で英語圏の読者にも捉えてほしい…①

⇒日本語の”Sensei”という単語をそのまま使おう(厳密には借用という翻訳手法)…②

「読者にどう捉えてほしいか」が決まれば「翻訳の技法」が定まる(対応表のようなもの)  
その対応表を参考にすれば、誰でも翻訳が可能になる！

# 流れ

1. 研究テーマ
2. 文化的要素の翻訳例
3. 仮説
4. 本研究の分析の道具となる理論の紹介
  - a. 翻訳技法 (Vinay & Darbelnetの翻訳7分類)
  - b. 読者に望む捉え方 (Bennetの異文化感受性モデル-DMIS)
5. 分析の方向性
6. 進捗報告



---

# 翻訳技法 (Vinay & Darbelnetの翻訳7分類)

大前提、翻訳って「そのまま写す」か「工夫して言い換える」のどちらか。

これをさらに細かく分けて、7分類したもの

**直接的翻訳(Direct Translation)** 🐣 そのまま持ってくる

借用 (Borrowing) そのまま持ってくる。外来語として輸入 (ex:「寿司」→”sushi“)

仮借 (Calque) 構造だけ真似して新しい言い方を作る (ex:「生け花」→“living Flowers”)

直訳 (Literal) 言葉の並びも意味もそのまま自然な範囲で写す (ex:折り紙→「Paper Folding」)

**間接的翻訳(Oblique Translation)** 🐣 意味が分かるように形を変更する

転換 (Transposition) 品詞や文法構造を変えて自然に。(ex:微笑む→”give a smile”動詞から名詞)

調整 (Modulation) 視点を変えて訳す。(抽象から具体等)(ex: “You are right” →その通りです)

等価 (Equivalence) ことわざ・慣用句等を相手文化の同じ役割の表現に変える。

例:朝飯前だよ→“It’s a piece of cake.”

翻案 (Adaptation) 文化そのものを置き換える

例:おにぎり→sandwich、節分→Halloweenイベント的な説明

---

→原文から訳文に訳されたときの翻訳手法をこれに基づき分類する

# 流れ

1. 研究テーマ
2. 文化的要素の翻訳例
3. 仮説
4. 本研究の分析の道具となる理論の紹介
  - a. 翻訳技法 (Vinay & Darbelnetの翻訳7分類)
  - b. 読者に望む捉え方 (Bennetの異文化感受性モデル-DMIS)
5. 分析の方向性
6. 進捗報告

## b. 読者に望む捉え方（Bennetの異文化感受性モデル-DMIS）

人が異文化にどれだけ慣れているかの成長段階

異文化対応のレベルを6段階に分けたもの

### 自文化中心主義の段階

- ①否認(Denial) “そんな文化あんの？”そもそも視界に入らない段階 ex)外国の挨拶ルールを知らない旅行者
- ②防衛(Defense) “俺の方が正しいだろ！”と敵対意識が生まれる。ex)なんで海外はこんなやり方なんだよ！
- ③最小化(Minimization) “結局みんな同じと差を軽く見積もる。ex)外国人も日本人も本質的には同じでしょ

### 文化相対主義の段階

- ④受容(Acceptance) “違いは確かにある”と理解し,受け入れる ex)「あ、文化ごとに価値観自体が違うんだ」
- ⑤ 適応(Adaptation) 相手文化の視点に切り替えて行動できる  
ex)現地の友達はノリが激しいから、日本人マインドオフにして思いっきりバカ騒ぎマインドに切り替え
- ⑥ 統合(Integration) 複数文化に馴染み、行き来できる  
ex)日本語・英語ともに“その文化らしい言い方が自然にできる。

⇒翻訳者の翻訳手法を選ぶときのどんな段階で理解をしてほしいか\_\_\_\_\_

（統合に近づくほど深く文化を理解しているとする）の具体的な指標として活用

# 流れ

1. 研究テーマ
2. 文化的要素の翻訳例
3. 仮説
4. 本研究の分析の道具となる理論の紹介
  - a. 翻訳技法 (Vinay & Darbelnetの翻訳7分類)
  - b. 読者に望む捉え方 (Bennetの異文化感受性モデル-DMIS)
5. 分析の方向性
6. 進捗報告

# 分析の方向性—分析対象

## 原文

○『こころ』夏目漱石(1914)

## 英訳

○『Kokoro』近藤いね子 (1941)

○『Kokoro』エドウィン・マクラレン(1957)

○『Kokoro』メレディス・マッキーニ(仮 ※)



※文献を無料で入手でき無さそう

# 分析の方向性一分析手法

## ①文化的要素の抽出

原文『こころ』から日本文化が関わる語句(例: 先生 / 書生 / 将棋...)を含む文を抽出

## ②翻訳技法7分類を割り当てる

抽出した文化的要素が英訳でどの翻訳手法(7種類)に当たるかを分類

例)

先生		“Sensei”	👉 借用(そのまま持ってきて、外来語として輸入)
書生		“student”	👉 調整(視点変更。具体→抽象)
将棋		“chess”	👉 翻案(文化そのものの置き換え)

# 分析の方向性ー分析手法

## ③DMIS(異文化感受性モデル)を割り当てる

翻訳された言葉が、読者にどれくらい理解を求めているか(6段階)を分類

例)「先生」を“Sensei”と書く場合

“Teacher”と訳さずそのまま残す。読者に「日本には“先生(Sensei)”という独特の呼び方がある」とそのまま受け止めてもらう姿勢

→ 文化の違いをそのまま見せている

→ 受容に相当する

【文化差の扱い方:DMIS】

否認 : 違いを認めない

最小化: 違いを薄める

受容 : 違いをそのまま見せる 👉 “Sensei”はここ

適応 : 相手文化に合わせて説明

統合 : 複数文化を柔軟に行き来する

④ ①～③で集めたデータを「翻訳技法×異文化感受性」の表を作り、法則を見出す

# 流れ

1. 研究テーマ
2. 文化的要素の翻訳例
3. 仮説
4. 本研究の分析の道具となる理論の紹介
  - a. 翻訳技法 (Vinay & Darbelnetの翻訳7分類)
  - b. 読者に望む捉え方 (Bennetの異文化感受性モデル-DMIS)
5. 分析の方向性
6. 進捗報告



# 進捗報告

## データ収集の進捗

- ・『こころ』1章 - 先生と私を対象に160件程のデータ抽出済み

## 分析の進捗

160件のデータに対して、

- ✓ 翻訳技法の分類（全てラベリング済み）
- ✓ DMIS(異文化感受性モデル)の分類（全てラベリング済みだが未検閲）

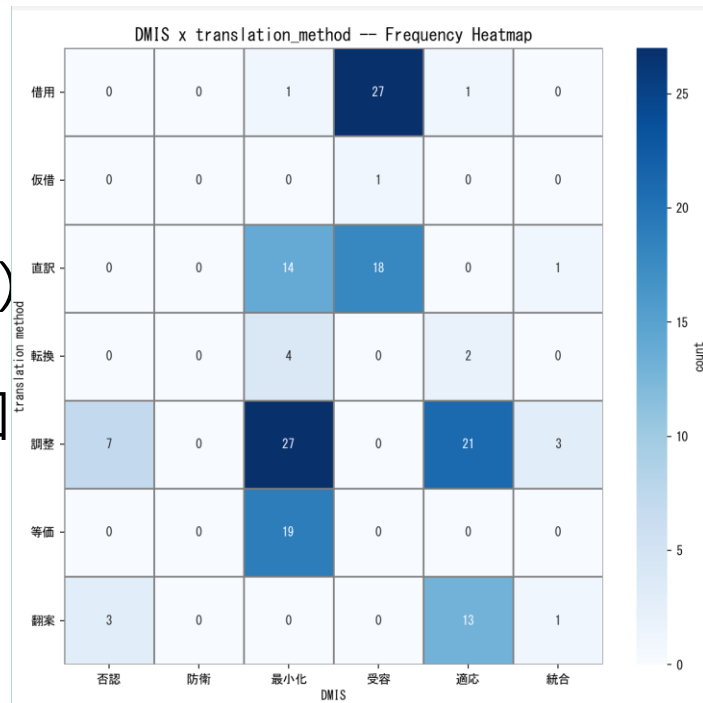
## 実際のデータ

その時私はまだ若々しい書生であった。	書生	I was a young student then.	調整	最小化	原文「書生」を"student"と訳し、日本の特定の学生像をより普遍的な「学生」という概念に調整することで、文化差を最小化した。
--------------------	----	-----------------------------	----	-----	--

# 進捗報告

## 現時点の分析結果

- 借用 29個(最小化 1、受容 27、適応 1)
- 仮借 1個(受容1)
- 直訳 33個(最小化14個、受容18個、統合1個)
- 転換 6個(最小化4個、適応2個)
- 調整 58個(否認7個、最小化27個、適応21個)
- 等価 19個(最小化19個)
- 翻案 17個(否認3個、適応13個、統合1個)



---

# 進捗報告

## 現時点でわかること

### ①訳者1人に関する分析だと翻訳全体について語れない可能性がある

「直訳」「調整」「借用」が圧倒的に多い。訳者いね子は“元の文化をそのまま残す”か“わかりやすく整える”どちらかを使い分けていることが分かる。これはいね子の癖である可能性も考えられるため、翻訳全体の理論を語るためにも他の訳者の訳文を分析する必要がある。

### ②手法ごとにDMISの偏りが明確

等価＝最小化(19/19) ⇒ 文化差を目立たせない場面で選ばれがち

借用＝ほぼ受容(27/29) ⇒ 文化差をそのまま提示したい場合で使われる

翻案＝適応が中心(13/17) ⇒ 文化差はあるけど、読者が理解できる形に  
整えたいときに選ばれる

---

---

## 参考文献

- Vinay, J. P., & Darbelnet, J. (1958). *Stylistique comparée du français et de l'anglais: Méthode de traduction*.
  - Bennett, M. J. (1993). Towards ethnorelativism: A developmental model of intercultural sensitivity.
  - Natsume, S. (1941). *Kokoro* (Ineko Kondo).
  - Natsume, S. (1957). *Kokoro* (E. McClellan, Trans.).
  - Natsume, S. (2010). *Kokoro* (M. McKinney, Trans.).
-

---

# データや使用しているツール

分析済みのデータ(163件 11/18現在)

<https://docs.google.com/spreadsheets/d/1a17kYiRNt9TRoedJSiVp0YtTfuiKqSZ51a4lRqLh5bl/edit?usp=sharing>

使用しているツール(雑多にまとめているだけです)

<https://github.com/zawa-kun/senior-thesis-tools>

---